

## 上杉隆氏「記者クラブの罪」講演要旨 3回連載 ②「記者クラブ」の問題点

## メディアの情報は管理されている

## 隠蔽される実態—事実が反映されない日本の報道

昨年12月、理事会でフリージャーナリストの上杉隆氏を講師に招き、自由な報道を阻害する既成勢力との闘い、問題事実などについて講演をいただいた。講演の要旨を3回に分けて掲載する。(文責：編集部)

今回は、「記者クラブ」の問題点についてまとめた。戦後65年、「記者クラブ」は問題視されず、変わることなく、今も存在し続けている。

## 1. 問題を見せない

(1) 「ジャーナリズム崩壊」で宣戦布告  
新聞、テレビから消えた「上杉隆」

私自身がこの11年間で体験してきたことを申し上げますと、ニューヨーク・タイムズ以降、週刊文春、文藝春秋、それから朝日新聞などで記事を書いてきました。そしてテレビでは「とくダネ!」、「ミヤネ屋」は大阪時代からずっとレギュラー、それから「ワイド!スクランブル」、「報道2001」、地上波ではバラエティに近いんですけども「TVタックル」、「そこまで言って委員会」、「太田総理・秘書田中」。こういうものにずっと出てきました。

時間の許す限り、あくまでもペンの取材が優先、余った時間で原稿を書いて、さらに余ったらラジオを入れて、まだ余ったらテレビに出ていました。

それでもいくつかのレギュラーを抱えていたわけですが、『小泉の勝利 メディアの敗北』という本を出したときに、正式に「記者クラブ」批判をしたのです。

本を出す、必ず新聞やテレビに取り上げられて呼ばれるのですが、その本を出した瞬間に、まずその本が出たことが現実として無くなっているわけです。テレビ局に行って、いつもと同じように話して、新しい本ですと出しても、「ありがとう、読んでみるね」と言って、1年たってもだれ1人読まない。本当は読んでると思うんですけど、その本が無かったかのように書評がゼロということが続いたのです。

その2年後に『ジャーナリズム崩壊』という本を出して、もう徹底的に宣戦布告をしたわけです。そしてテレビの中でも、「記者クラブ」問題というものを言い出したわけですね、それが『ジャーナリズム崩壊』を出した2008年です。

そしたら、自然と、9月とか3月とかで番組改編期に依頼が減っていきました。それまでレギュラーで出ていたのもたくさんあったのです。大体、月に50件ぐらいの依頼が来て、そのうちの5件ぐらい応えられたのですが、「記者クラブ問題」に入り出して徐々に批判を強めていくと、驚くことに、今現在の依頼は月にゼロ本。はっきりしているわけですね。

(2) 海外メディアは「記者クラブ」を報じる  
載ったことは一切無かったことになる

問題を見せないということがずっとつくってこられているわけです。ニューヨーク・タイムズは、私がいたときに1面トップで「記者クラブ」という問題を扱って、3年間で7回やりました。そしてCNNもやっていますし、BBCもやっていますし、ワシントンポストも、人民日報も、新華社も、すべて「記者クラブ」問題を扱います。

亀井さんと岡田さんが、去年記者会見をオープンにしましたが、そのときにニューヨーク・タイムズの1面トップで、亀井さんの顔写真、岡田さんの顔写真を載せて、「記者クラブ」やっとな崩壊、日本65年目に云々と結構長い記事が載ったのです。普通だったらニューヨーク・タイムズに日本のことが載るとみんな大騒ぎですね、朝から。ニューヨーク・タイムズもこんなに報じてますと、特別

な扱いですと。

ヤフーですら、その日のニューヨーク・タイムズはこの世になかったことになっております。つまり「記者クラブ」という文字が載った瞬間に一切無かったことになるわけです。

## 2. 競争原理が働かない

## (1) スcoopを出して、営業部門や地方に飛ばされる

海外ではスcoopを出せばスター記者で年俸も上がります。ところが日本の記者は、年俸制度ではないのです、世界で唯一。海外では、ジャーナリストというのは全員契約制なんです。私も1年ごとの契約更改をして、3年間ニューヨーク・タイムズに勤めましたが、日本だけが唯一、記者が社員なんです。

就職ではなくて就社。そうなる何が起るかというと、スcoopをとってもとらなくても給料は変わらないのです。となると、下手にスcoopをねらって大きな記事を書いて誤報だったらどうなるかというと、減点主義なので、その人は記者として生命が終わる可能性があるわけです。社員としては残りますけど。

だったら何も危険なことはやらずに、むしろスcoopをやらない方がいいとなって、みんなと横並び。そして官僚のペーパーに関しては、誤報でも誤報ということにならないのです。日本は。

ですから勝負をかけてスcoopを出しても、結果としてどうなるかというと、何であいつだけが抜け駆けしたんだと「記者クラブ」の出入り禁止。社内からは、おまえちょっと走りすぎだ、だめだよと。スcoop出して怒られて、次の人事で営業部門や地方に飛ばされると。

(2) 事実を目をつぶる記者が出世する  
一番損しているのは国民

それがバカらしくなって普通のまともな記者はみんなやめていく。そしてそれを見てる人は、何もやらない方がいいやということ、結果として目の前に事実があるにもかかわらず、それに対して目をつぶる。これが毎日、365日、戦後65年間続いてきた、日本の「記者クラブ」制度の実像なんです。みんな大人しくして、何もしない記者が出世して社長になると。

結果としてだれが損をしているかというと、政治家も損しません、役員も損しないです。記者たちも給料はちゃんと保障され、生活を保障されて損しない。一番損しているのは国民です。つまり真実を知らされないために、全く不都合なことが起こっても、それが当たり前のように享受しなくては行けないのです。

3. 無謬主義、官僚主義  
間違った情報が真実に

## (1) 訂正欄が毎日1ページあるニューヨーク・タイムズ

新聞、テレビは、大学入試にも出て一流だと洗脳されて育ててきています。ですから雑誌とかネットとか見たら、ああインチキだねと、必ずこういう論調はあります。



上杉隆氏  
フリージャーナリスト。自由報道協会代表。

今もそうですね。「ああネットにあった有名な情報だ」こういうふう言う人っていないですね。

どうしてかという、ニューヨーク・タイムズもネットの記事も、僕の媒体もそうなんですが、例えばニューヨーク・タイムズも毎日コレクションという欄があるんです。コレクションというのはR(correction)の方です。訂正欄が1ページにわたって、毎日あるわけです。

例えば、1984年の記事。過去こういうふう書いたが、実はその後、人が亡くなって遺書が出てきたときに事実が違った。改めて再取材したら事実はこちらだったので、訂正する。昨日の記事はこちらだった、情報源がこういうふう言ったが、実はもう1人情報源が出てきて、正しくはこちらだったので、訂正する。これが訂正記事なんです。これが毎日あるわけです、ずっと。

ところが日本の場合は大きく間違えて、小さく社会面の33面ぐらいで小さく謝る。村木局長(厚労省)のときもそうですけど、連日、朝日新聞含めて毎日、局長はいかにも悪そうだといい1面トップでやっているのです。そしてどうも誤報だとわかった瞬間にスーッと記事を引いて、ほとぼりが冷めたところに33面のところで、「村木氏については情報が一部違いました」と。そして、今度は検察がフロッピーディスク書き換えといったら、私たちが悪いんじゃないです、検察がウソをついてたんですとって、1面トップで高らかにやると。

## (2) 無謬主義 間違えたら事実の記事に合わせる

実際、ニューヨーク・タイムズはミスが多いのです、記者も。1週間に10回ミスする記者もいます、ひどいんです。ところが1回スcoopを出せばいいんです。それは何故かという、間違えたらすぐ訂正して謝ればいいんです、毎日訂正すると。いわゆるネットみたいなものですよね。それが実はニューヨーク・タイムズが150年以上、他の新聞もそうですけど、ずっと全部やっています。

ところが日本は無謬主義、官僚主義なんで、間違いはいけない。10本のスcoop出しても、1本の間違いを出してしまえば左遷されるわけです。減点主義ですから絶対に間違えないようにすると。

でも人間ですから間違いは起きますね。じゃあどうするか。間違えた事実があったら、その新しい事実を報じるのではなくて、自分の記事が間違いじゃないという前提ですから、事実を記事に合わせるわけです。

つまり自分たちの記事に事実をずらせばいい。ずらせなかった場合は黙殺すると、これがずっと続くのです。

## (3) 冷静に見るメディアリテラシー

海外のメディアは訂正欄という形で間違いを認める、日本は認めないということで圧倒的に差がつき、そして国民の受け取る情報量が全く違ってきます。

先ほどの日本では、新聞、テレビは一流だと、雑誌、ネットはインチキだという話につながりますが、海外ではそういう間違えた新聞を小さいころからみんな見てるんですね。だから例えばニューヨーク・タイムズが間違いだと言ったら、ああそうですねと、別にニューヨーク・タイムズが間違えたんじゃないでしょうと、このニューヨーク・タイムズのこの記者のこの記事が間違いでしょうと。それは間違いするでしょう、自分と同じ人間だからというふうな感覚にみんななっているのです。みんな間違えているから、冷静に見ているわけです。まさにこれがメディアリテラシーなんです。(9月号に続く)



協会の会議室で講演会を行った